The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ケアに満ちた教養小説 : D・H・ロレンス『息子と恋人』における（反）成長物語再考
Author(s)	霜鳥, 慶邦
Citation	人文学林. 2024, 1, p. 85-105
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95134
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ケアに満ちた教養小説

―D・H・ロレンス『息子と恋人』における（反）成長物語再考―

霜　鳥　慶　邦

A Care-full Bildungsroman:

Rethinking the (Anti-)Developmental Narrative in D. H. Lawrence's *Sons and Lovers*

SHIMOTORI Yoshikuni

This paper aims to reexamine D. H. Lawrence's autobiographical novel *Sons and Lovers* (1913), which the author refers to as 'the tragedy of thousands of young men in England', in relation to the tradition of the Bildungsroman and in terms of care. Reconsidering the domestic and social environments depicted in the story and then reinterpreting the protagonist Paul's (anti-) development — particularly his loss of youth, his restlessness and his experiences of receiving and giving care —, the paper reevaluates the novel not as a tragedy or a story of the protagonist's development into an independent individual, but as a care-full Bildungsroman that emphasizes the importance of mutual interdependence and care among people.

キーワード：D・H・ロレンス，『息子と恋人』，ケア

1. 若者たちの「悲劇」から人生の「肯定」の物語へ，そしてさらにその先へ

D・H・ロレンス（D. H. Lawrence）の第三作目の長編小説『息子と恋人』（*Sons and Lovers*, 1913）は，作者の自伝的要素に基づき，労働者階級の生活を写実的に描いた作品である。この小説を執筆していたころのロレンスが，担当編集者エドワード・ガーネット（Edward Garnett）に宛てた手紙（1912年11月19日付）に次のように記したことはよく知られている――「これは偉大な悲劇です。〔……〕イギリスの何千もの若者たちの悲劇です」（*Letters* 477）。両親の不和，息子たちを「恋人」として愛する母，父を「憎み」「嫉妬」する息子たち，母の強大な「力」ゆえに他の女性とまともな恋愛関係をもてず，「分裂」したまま病で死ぬ長男，同じく「分裂」に苦しみ，母の死後，死の方向へ「漂流」する次男（*Letters* 477）――こうしたエピソードから成るこの小説を，ロレンスは，自伝的な要素に基づきつつ，多くの「若者たち」に共通の普遍

性を備えた「悲劇」として完成させることを意図した。

作者の意図はそうであるとして，小説出版当時とは性や社会の価値観が大きく変化した現代の「若者たち」にとって，母親に対して異常なほどの執着を抱き，女性との性的関係に対して過剰な不安に苦しむ主人公の「悲劇」が，どれだけ共感の対象となりうるかという疑問が浮かぶのも事実だ。少なくとも現代の日本の「若者たち」にとっては，2016年の小野寺健・武藤浩史によるフレッシュな新訳の登場により，この小説を「悲劇」とは別の物語として読みうる機会が与えられた。「訳者あとがき」で武藤は，この小説を「悲劇」と呼ぶ作者の発言の妥当性に疑問を呈し，作中には「生きることは楽しいと感じさせる人生の肯定的な側面があまりにも数多く書きこまれている」ことを，複数の場面を挙げながら力説する（「訳者あとがき」788）。

もちろん，レイモンド・ウィリアムズ（Raymond Williams）が指摘するように，この小説には，地方の共同体の生活における「肯定的」な要素だけでなく，「衝突」，「喪失」，「挫折」，「絶望」といった諸相が描かれており，さらにこの小説が描く「全体的で連続的な経験」においては，「私的な領域と社会的な領域に区別されがちな物事が，実際には人生における一つの複雑な過程として認識され」ている（*The English Novel* 173–75），という点を踏まえれば，「人生の肯定的な側面」は，その他のさまざまなテーマとの「複雑」で「連続的」で「全体的」な関係性において読解・理解されなければならないはずだ。本論は，『息子と恋人』について作者が設定した「悲劇」という枠の妥当性を疑う点では，武藤の姿勢と近いが，生きることの楽しさを描く場面を強調するのではなく，それをも含んだ「全体的で連続的な経験」を可能なかぎり捉えることで，この小説の新たな読みの可能性を探究することを試みる。

そのために本論が『息子と恋人』論に導入するのが，ケアの概念だ[1)]。人々の間の相互依存関係を重視するケアの概念は，ウィリアムズの言う「全体的で連続的な経験」，「一つの複雑な過程」の一側面を明らかにするための有益な視座を提示してくれるはずだ。本論は，教養小説（ビルドゥングスロマン）『息子と恋人』を，主人公ポールの成長[2)]（あるいはその未達成）を中心に，ケアの観点を含めて読み直すことを目的とする[3)]。ただしこの作業には，ある種の困難，というよりも矛盾がつき

1）本論におけるケアの概念は，ジョアン・C・トロント（Joan C. Tronto）がベレニス・フィッシャー（Berenice Fisher）と共に提示した定義に基づいている――「もっとも一般的な意味において，ケアは人類的な活動a species activityであり，わたしたちがこの世界で，できるかぎり善く生きるために，この世界を維持し，継続させ，そして修復するためになす，すべての活動を含んでいる」（24）。これでは「あまりにも広い定義」だと思われるかもしれないが，我々の日常の行為のほとんどがケアに関係している，とトロントは述べる（25）。トロントとフィッシャーは，ケアの4つの局面として，「関心を向けること Caring about」，「配慮すること Caring for」，「ケアを提供すること Caregiving」，「ケアを受け取ること Care-receiving」を挙げる（27–29）。

2）教養小説と成長のテーマについて考えるうえで，まずはレイモンド・ウィリアムズの『田舎と都会』（*The Country and the City*, 1973）における教養小説論を参照しておくことが重要だろう。ウィリアムズは，「社会的・経済的解決と個人的な達成が単一の次元にあるかたちで一連の落着を迎えて終わる形式」から「この単一の次元を拡張し複雑化し，ついには崩壊させ，単独者が，社会から遠ざかり抜け出すことによって精神的成長を達成し，独り立ち去ることをもって終わる形式」への変遷を指摘し，ジョージ・エリオット（George Eliot）の小説をその「移行期」として位置づける（*The Country* 254）。古典的な教養小説においては，主人公の成長は主題ではなかった。『息子と恋人』はもちろん，主人公の「精神的成長」を主題とする後者に属する。

3）ケアの観点からの文学研究は近年盛んに行われているが，古典的で代表的な例として，ケアの倫理を提唱したキャロル・ギリガン（Carol Gilligan）の『もうひとつの声で』（*In a Different Voice*, 1982）を挙げたい。ギリガンは心理学者であるが，彼女の著書では多くの文学作品が参照されており（ロレンス文学も一度だけ言及される），文学研究の観

まとうことがあらかじめ予想される。というのも，教養小説――厳密には19世紀後半以降の教養小説[4)]――は，主人公が自律的・自立的な主体へと成長する過程を描く文学ジャンルであり，従来の『息子と恋人』研究もそのような観点から論じることが多かったのだが[5)]，この自律的・自立的個人という主体イメージは，人間にとって不可避で不可欠の他者への依存を否認した結果に他ならないとして，ケアの倫理の立場から問い直しを求められるからだ[6)]。このように，教養小説とケアのテーマの間には相容れない要素が存在するのだが，そうであるがゆえに，両者の間の関係性を慎重に精査することは，この小説の大胆な再解釈と再評価の可能性をひらいてくれるはずだ。

議論は，教養小説の主人公としてのポールの成長（の未達成）の読み直しが中心になるが，作者が「悲劇」と呼ぶこの物語の家庭環境と社会環境を再考するために，まず第2–3節で，ポールの両親の置かれた状況について，ケアのテーマに注目しながら再考する。それを踏まえて，第4–6節でポールを分析する。第4節ではポールの（反）成長を教養小説の伝統との関係で再考し，第5節では小説の最終章のポールを集中的に分析し，エンディングの新たな解釈を提示する。そして第6節ではポールの（反）成長をケアの倫理の視座からより徹底して再考し，さらに，教養小説としての『息子と恋人』そのものの再解釈と再評価を行う。最終的に，この小説を，「悲劇」でもなく，生きることの楽しさについての物語でもなく，自立と自律の物語でもなく，相互依存を尊重するケアに満ちた教養小説として新たに定義し直すことを提案したい。

2. 夫と父

ウォルターとガートルードは，互いの身分の違いゆえに惹かれ合い結婚するが，幸福な新婚生活は長くは続かず，二人の間に不和が生じる。その主な理由は，ウォルターの金銭問題，無教養，飲酒，癇癪などに帰せられる。ただし，ウォルターの人物像に関して見逃してはならない特徴がもう一つある。それは，疲れが頻繁に強調されている点だ。ウォルターはとにかく疲れている。たとえばポールが生まれた日，ウォルターは終業時刻が過ぎても仕事をやめず，「働きすぎ」で「疲れ」，「気が高ぶる」（41–42）。帰宅して赤ん坊の誕生を知らされても，「あまりにも疲れすぎていて」，「妻の具合が悪かろうと，また一人，息子が生まれようと，どうでもよい」と感じてしまう（43）。また，ある日の夕方，自宅でガートルードと一緒に茶を飲んでいる組合教会派の若い牧師に向かって，肉体労働による「疲れ」を何度もアピールする（46–47）。このころのウォルターは「度を超して苛々して」いるのだが，その理由について，語り手は，

点からも興味深い一冊である。

4）本論の注2のウィリアムズの論を参照。

5）たとえば，寺田，川本，Alden，Buckley，Gillisなどを参照。

6）Gilligan，Kittay，The Care Collective，岡野，小川を参照。

「仕事で疲れきっているらしかった」と説明する（51）。テクストの語りは，ウォルターの気性の荒さと暴力性が，決して彼の生得的な特徴ではなく，過酷な労働環境による結果であることを読者に示唆する。

ウォルターの人物像と家庭環境と社会環境との関係については，テリー・イーグルトン（Terry Eagleton）が，「労働の性分化」の観点から明快に説明している。

> 資本主義社会では，父親は生産過程で労働力として使われ，一方，母親は，父親と未来の労働力（子供）を物質面，精神面双方から「維持」する仕事を任せられる。こうした家庭の中で，その窒息しそうな精神生活からモレル氏が疎外されていく原因の一端が，この社会分化にある――父親は子供たちから引き離され，子供たちと母親との心情的結びつきはいっそう強くなる。もし，モレル氏のように，父親の仕事が特に心身の激しい消耗と抑圧を伴うようなものであれば，家庭における父親の役割は，なおのこと，弱いものとなるだろう。〔……〕労働過程そのものが，疲労をもたらし，過酷な鍛錬を強要する性質をもつために，彼は，家庭の中では，怒りっぽく暴力をふるいがちになり，これによって子供たちを母親の腕の中へと追いやり，子供を取られまいとする母親の所有欲にいっそう拍車をかけることになる。（152）

イーグルトンは，テクストの細部を慎重に分析し，「責めを負うべきは彼ではなくて，彼を，生産機構の中の一個の歯車としてしか利用できない貪欲な資本主義であることを，作者の意図とは別に，テクストが私たちに示してくれる」と指摘する（154）。たしかに，テクストをある程度注意深く読めば，身重の妻への「懺悔」と「同情」の気持ちから家事を手伝い（37），誰かが病気になると優しく振る舞い（91），家族との親密な関係性を不器用ながらも保とうとするウォルターの姿を確認できるだろう。だが彼のそのようなケアの精神を無慈悲にも挫いてしまう大きな要因の一つが，炭鉱での肉体労働による疲れである。ウォルターが家族に向かって，「おれくらい，家族のために一所懸命働く奴はいない！〔……〕精一杯働いて，犬みたいに扱われる」（142）と怒鳴るとき，その言葉は，決して誇張でも嫌味でもなく，「貪欲な資本主義」システムの「歯車」として懸命に働くにもかかわらずその過酷さを理解してもらえない坑夫の心からの訴えとして響くだろう。モレル家の家庭内の衝突と不和は，エディプス的な枠に還元してすべてを説明できるものではなく，家族の枠を包摂する社会構造によって外部からもたらされた圧力の結果でもあるのだ。

イーグルトンの指摘のとおり，ウォルターは資本主義システムの歯車として利用される存在であるのだが，社会システムの一部としてのウォルターの存在が別のかたちで露わになるのが，彼が病気になる場面だ。「坑夫によくあるように」，ウォルターは「大の薬好きで，不思議なことに薬にはよく自分の金を出した」（61）。あるときウォルターは「脳炎」に苦しみ，ガートルー

ドが「看護」しなければならなくなる（61）[7]。ここで注目したいのは，ウォルターの病気が，家庭内の問題だけには収まらず，地域社会や職場といった公的領域と深く関わる様子だ。まず近所の人々が，子供の世話や台所仕事を手伝い，ガートルードを支援してくれる。また，いくつかの「互恵会」から「週17シリング」が提供され，さらにウォルターの職場の切羽頭が，毎週金曜日に「その週の切羽の収益の一部」を割いてくれる（61–62）。「彼らがこれだけ気前よく助けてくれなかったら，返済不能な借金を背負わずには，切り抜けられなかっただろう」（62）。

ウォルターはたしかに資本主義システムの歯車として利用され，疲労する。だがシステムの一部であるがゆえに，彼が病気になった際には，職場の制度や仲間たちが金銭的に支援してくれる。それは後にウォルターが職場の事故で足を複雑骨折し入院するときも同様だ。「夫の入院中も，生活には困らなかった。毎週，炭鉱から14シリング，傷病互助会から10シリング，障害基金から5シリング入ったほかに，幾人もの切羽頭が，5シリングから7シリングほどミセス・モレルに届けてくれたから，ゆとりをもてた」（112）。ウォルターの身体は社会システムに深く組み込まれており，社会的に酷使されると同時に守られてもいる。父の入院中に，ポールは「今は僕がこの家の主人だね」（113）と嬉しそうに言うが，この無邪気な発言が，負傷した父のための金銭的支援によって支えられているという事実は，何とも皮肉なことである。（この発言の直後に，ポールの職探しの場面が続き，ポールの経済的無力さが際立つことになる。）

ウォルターの病と怪我をめぐる金銭の動きは，物語後半でガートルードが癌を患う場面ときわめて対照的だ。彼女の病をめぐる問題の一つが，金銭的負担だ。「ポールは無一文も同然だった。だが，金を借りることはできた」（417）。そしてガートルードを家に連れて帰るのだが，「看護婦は雇えなかったので，アニーが世話をしに来た」（435）。ガートルードが重病になろうとも，社会の支援システムが動くことはなく，家族に金銭的負担が重くのしかかる。

ウォルターの描写の特徴の一つとして，家の中にいるときも，語り手によって「父」や「夫」ではなく「坑夫」と呼ばれるという点がある。これは，家庭におけるウォルターの疎外を表すと同時に，彼がいかに社会的な存在であるかをも示唆している。ウォルターの属する男性の社会的空間が家庭の私的空間にまで入り込む様子は，炭鉱の給料日に，ウォルターと同僚たちが，ウォルターの自宅で金を分ける場面によく表れている。「男たちが精算している間，女は席をはずすのがたしなみだった。切羽の親方の精算のような男のプライバシーに首を突っ込んだり，一週間の正確な稼ぎ高を知ったりするのは，無作法なことだった」（234）。家庭は，「男のプライバシー」の空間へと変わり，女性であるガートルードは自分の家の中で排除される。

ここまでの考察から，私的領域と公的領域を往復するウォルターを通して，資本主義産業社会がもたらすさまざまな要素――疲れ，病，怪我，金銭的支援――が家庭環境に直接的な影響を与える様子が見えてくる。そしてこの小説の「悲劇」は，エディプス的な解釈枠によっての

7）ウォルターの属する炭鉱産業における傷病や経済的支援についての具体的な情報については，Bohata, Jones, Mantin and Thompsonが参考になる。

み説明できるものではなく，社会へと開いて理解される必要があることが明らかになるはずだ。

3. 妻と母

前節で見たように，イーグルトンは，「労働の性分化」によってウォルターが家庭から疎外される様子に注目した。だが同一の原理によって疎外の対象となるのは，むしろ女性であるガートルードである。彼女は，結婚の初期から，「わたし自身が無視されているような人生だ」と感じる（14）。ケイト・ミレット（Kate Millet）が言うように，「モレルの妻〔……〕は，自立した生活をしたことが全くなく，また何かを達成する道はいっさい奪われている」（248）。ガートルードの人生は，「労働の性分化」によって社会から疎外され，満たされることなく終わる承認欲求の日々と言えるだろう。

アクセル・ホネット（Axel Honneth）は，ナンシー・フレイザー（Nancy Fraser）との共著『再配分か承認か？』（*Umverteilung oder Anerkennung?*, 2003）において，「職業化されたどのような活動も，その担い手の過半数が女性になるや否や社会的な身分秩序のなかで自動的に価値を失う」と指摘し，続けて，「女性と男性というジェンダーは，この社会的分業体制においては文化的な基準として機能し，この文化的な基準が労働内容の特性とは無関係に，いかなる社会的な価値評価が一定の活動に対して規範的にふさわしいのかを決定する」と述べる。そしてこう主張する――「女性の業績をあげる能力を（自然主義的に基礎づけて）割引くこのような文化的なメカニズムによってようやく，次のことが説明できる。つまり，ブルジョワ的－資本主義的社会がみずからの前提について了解する場合に，なぜ女性たちによって実際に行われる家事や子育てという活動が，当初はまったく概念的に「労働」として登録されなかったということが可能であったのかを，説明することができる」（「承認としての再配分」173-74）。

ホネットの指摘する非対称的ジェンダー関係に基づく「社会的分業体制」は，『息子と恋人』のモレル家の日常生活に散見される。一例だけ挙げよう。ウォルターが早朝から庭で大工仕事をする場面は，彼の陽気で温かな一面を表す例として言及されることが多い。器用に「直しもの」をするウォルターが吹く「生気に満ちた音楽的で心地よい口笛」は，ガートルードをも「温かく安らかな気持ち」にさせる（27）。普段のウォルターがどれほど酒と金にだらしなく暴力的であろうとも，彼が家庭のために行う些細な行為によって，彼の好意的な評価がある程度保たれることになるだろう。

それはよいとして，この場面で忘れてはならないのは，ウォルターが大工仕事をしている最中，ガートルードが台所で家事をしている点だ。読者は，ウォルターの大工仕事を好意的に受けとめる一方で，家事をこなすガートルードには特別な注意を払うことなく読み進めてしまうのではないだろうか。家事に対するガートルードの義務と責任の気持ちはとても強い。たとえば，ある晩にウォルターと喧嘩をして家から追い出された身重のガートルードは，夜の闇と寒

さの中で過ごす。その後家に戻った彼女は，夫が眠っている間に，「激しい疲労」を感じているにもかかわらず――ウォルターと同様に，ガートルードも日常的に疲れている――「夫の朝食の支度をし，炭鉱へ持っていく水筒をゆすぎ，作業服を暖めておくために暖炉の前に掛け，そのそばに靴を揃えて，洗ったスカーフと弁当とりんごを二つ一緒に並べ，石炭を足してから寝室に上が」る（35–36）。読者は，大喧嘩の後ですら家事をこなすガートルードの姿に，どれほど関心を向けてあげられるだろうか。むしろ読者の注目と共感は，このエピソードの直後に配置された，「身重で働く妻のつらさ」を理解し，「後悔と同情の念」から「進んで妻の手助けをする」ウォルター（37），さらに妻の代わりに家の中を掃除して「大得意」になるウォルター（39）へと向けられるのではないだろうか。

ガートルードの労働の過小評価が如実に表れるのが，肺炎にかかったポールの看病のエピソードだ。この場面は，ガートルードの愛の対象が死んだ長男から次男ポールへと移る，プロット上の決定的な転換点となる箇所である。ポールは7週間，病に苦しむ。看護婦を頼む金銭的余裕がないため，その間，ガートルードがポールの世話をするのだが，テクストには，ガートルードが体験したはずの長期にわたるケア行為と心身の負担に関する具体的な記述がいっさいない。（ちなみにテクストは，「赤と黄金色のチューリップの鉢」（171）を買ってくるウォルターについての一文を挿入することで，彼の温かな一面を読者にさらりと印象づけることを忘れない。）代わりにテクストは，ポールが母の胸に頭を押しつけて「愛の安らぎ」に浸る様子と，「二人の心」が「完全に親密な状態へ融合」する様子を通して，闘病と看病の出来事を，母子の一体化というきわめて抽象的で美的な親密圏へとロマン化する（171）。

テクストは，ポールがまだ赤ん坊のころ，ガートルードが夫の暴力のために額から血を流し，その血がポールの頭皮に染み込んでいく様子を通して，母子の一体性を読者に強烈に印象づける（54–55）。そして今度は母による子へのケア行為を通して，母子の一体化のドラマを再演する。母子関係をあらゆる愛情関係の原点とみなすホネットは，母子の一体の関係を「根源的な融合体験」，「完全な充足状態」と呼ぶ（『承認をめぐる闘争』141）。テクストは，ケア行為を母子の一体化のエピソードへと美化・ロマン化することで，語りの修辞レベルにおいて，二人の関係をホネットの言う「根源的な融合体験」，「完全な充足状態」へと退行させる。

実際のケア実践には，「矛盾や軋轢，さらには不満」（岡野153），あるいは「相反する感情」（The Care Collective 27）が内在する[8]。だがテクストは，母による子のケアの場面からそのような要素をすべて取り除き，母子の過剰なまでの一体性を強調する。その語りは，この場面が母子の絆を劇的に強化するプロット上の転換点となることを印象づけるにはきわめて効果的だろう。だが同時に，「愛」，「安らぎ」，「親密さ」，心理的「融合」のみを前景化することにより，結果的に，母がケア行為の中で実際に体験したはずの「矛盾」，「軋轢」，「不満」，「相反する感

8）ケア・コレクティヴ（The Care Collective）は，英語の「ケア（care）」という語が「ケア，関心，不安，悲しみ，嘆き，そして困惑」を意味する古英語の「カル（caru）」に由来することを紹介し，この語の多義性を指摘する（27）。

情」を不可視化する効果を発揮することもまた事実である。このような語りの背後には，「女性たちによって実際に行われる家事や子育てという活動が，当初はまったく概念的に「労働」として登録されなかった」（ホネット「承認としての再配分」174）という事態が深く関与しているだろう。テクストの関心は，女性による労働そのものよりも――そもそもそれは労働というよりも，妻・母による愛の自然な行為とみなされる――，そこから引き出される象徴的意味合いの方に向けられることになる。

この場面を，テクストの後半で癌に苦しむ母をポールとアニーが看病する場面――ケアする側とされる側が逆転する場面――と並べてみると，両者の間の大きな違いが浮かび上がる。テクストは，第14章の多くのページを割いて，交替で母を看病するポールとアニーの心身の疲労と苦しみを詳細に描く。母の看病をするポールは，「恐怖と苦悩と愛情に息をつまらせ」る（429）。「自分の命が体内で切り刻まれていく」感覚に襲われ，「急に涙がこみあげ」る（429–30）。憔悴したポールは，バクスター，クララ，ミリアムに自分の苦悩を打ち明けて依存しようとする。アニーは看病の「疲れ」のため苛立ちを隠せず，「こっちの方が，そういつまでももたないわ――皆，気が狂ってしまう」と言う（436）。クリスマスが近づくころには，二人とも，「これ以上は耐えられない」気持ちになる（437）。ついに大量のモルヒネ入りのミルクを母に飲ませることを決意する二人は，「いたずらを企む子供のように一緒に笑」う（437）。そして恐ろしい顔で鼾のような大きく荒い呼吸をする母の死を待つ辛い時間を経て，ようやく二人の子による母の看病は終わる。このエピソードでは，病の母は完全に客体化されており，語りの焦点はケアする子の側に当てられ，その疲労と苦悩と葛藤が詳細に描写される。

このように，テクストの語りは，ガートルードが子をケアする場面では，彼女の行為を過剰に象徴化・美化し，逆にガートルードが子にケアされる場面では，語りの焦点を子に合わせ，重労働による心身の疲労を詳細に描く。このような語りの偏向は，結果的に等身大のガートルードを見えにくくする。「わたし自身が無視されているような人生だ」（14）――かつてガートルードが発したこの言葉は，物語の内容レベルだけなく，語りの構造レベルにおいても当てはまることになる。

4. 息子と恋人

モレル家の家庭環境とそれをとりまく社会環境の再考を踏まえて，本節は，ポールの成長（の未達成）を教養小説の伝統との関連で再考する。フランコ・モレッティ（Franco Moretti）[9]は，

9）モレッティの教養小説論は本論の重要な基盤の一部となっている。そのモレッティの著書の中で，『息子と恋人』は一度だけ言及されている。モレッティは，教養小説を「社会的流動性」の可能性に満ちた中産階級と深く結びついた文学形式とみなす。そのような文学とは異なる存在として，モレッティは，『日蔭者ジュード』（*Jude the Obscure*），『マーティン・イーデン』（*Martin Eden*），『息子と恋人』を挙げ，それらを「労働者階級教養小説」と名づける。そしてその特徴として，「貧困が強いる容赦ない喜びの抑圧」を指摘し，その主人公を「夢見る権利のない若者」と呼ぶ（x）。だが実際に『息子と恋人』を熟読すれば，生の喜びに満ちていることは明らかだ。本論は，モレッティの教養小説論の大枠を援用するが，モレッティによる『息子と恋人』の捉え方には批判的な立場をとることになる。

教養小説の主人公の「若さ」は，社会的変化による絶えざる「流動性」と際限なき「内面性」を特徴とする「モダニティ」のトロープであると述べる。ではモダニティの「無定形」のダイナミズムにどう「形」を与えればよいのか。モレッティによれば，教養小説は，主人公を不安定な「若さ」の段階から安定した「成熟」の段階へと移行させ，社会に調和・統合させるという方法で，形も安定性も際限もないモダニティのダイナミズムを，強制的に「形式」の内部に制限することによって表象するという，「本質的に矛盾した」表現形式なのである（4-6）。

『息子と恋人』の興味深い特徴は，主人公の成熟とは無関係に，ある時点を境にテクスト世界から若さが消える点だ。その転換点となるのが第9章だ。ポールの姉と弟が家を出た後の雰囲気を，テクストはこう語る――「ポールは身の回りの生活が変わりつつあるのを感じていた。青春の時期（The conditions of youth）は過ぎた。今は大人ばかりの家庭だ」（289）。それまでしばしばポールを「若者」と呼んでいた語り手は，この時点以降，そうすることをぴたりとやめる。テクストは，若さを成熟へと至るための通過点として描くのではなく，その喪失ゆえの「奇妙な空しさ」（289）を強調する[10]。

同様の感覚は，ポールが24歳で初めてミリアムと肉体関係をもち，童貞を喪失する場面によりはっきりと確認できる――「もう若者ではなかった。だが，どうして，魂が鈍く痛むのだろうか。どうして死を思い，死後の世界を思うと，これほどまでに甘美な気持ちになり，心が慰められるのだろうか」（334）。さらにテクストは，物語の最終章で，職を得て「自立」（459）したミリアムについても，ポールの視点を通して次のように描く――「顔は昔よりずっと老けて，小麦色の喉元もずっと細くなった。〔……〕ミリアムの若い盛りはあっという間に過ぎ去った。ほとんど木のようなこわばりが感じられた」（460）。ミリアムの「自立」は，成長でも成熟でもなく，若さの喪失として描かれる。ここで注目したいのが，「ほとんど木のようなこわばり（A sort of stiffness, almost of woodenness）」という表現だ。‘stiffness’は，かつてポールがミリアムに熱く語った自身の芸術論の中に登場する語だ。

> 「それは――それは，この絵にはほとんど影がないからだ。光が揺らめいている（shimmery）だろう？　葉っぱの中や至るところに，揺れてやまない（shimmering）生の原形質を描きこんだみたいだろう。外形のこわばり（the stiffness of the shape）じゃないんだ。そんなの，僕には死んでいるも同然だ。この揺らめき（shimmeriness）こそが，本当の生だ。形は抜け殻だ。本当は，揺らめき（shimmer）が内部にあるんだ」（183）

テクストは，上の短い引用中に，「揺らめき」を表す語それ自体に揺らめきを加えながら四度も

10）『息子と恋人』における若さの喪失の現象は，モレッティがスタンダール（Stendhal）とプーシキン（Pushkin）の小説に見出した，「成熟」は「獲得」を意味するのではなく「若さ」の「喪失」を意味するというパターン（90），そしてバルザック（Balzac）の小説に見出した，「若さを失うが大人になることがない」というパターン（135）に近い。

書き込み（‘shimmery’，‘shimmering’，‘shimmeriness’，‘shimmer’），生の「揺らめき」に満ちた「原形質」と「外形」の「こわばり」を対比させる。ポールの芸術論に従えば，若さを失ったミリアムは，たとえ職を得て「自立」し社会的に承認されようとも，生の「揺らめき」に満ちた「原形質」を喪失し，「死んでいるも同然」の，「外形のこわばり」あるいは「抜け殻」のごとき存在となる。同時に，このようなミリアム像は，若さを喪失したまま成熟することのできないポール自身の投影でもあると言えるだろう。

ポールの変化で注視すべきは，若さが消えるのとほぼ同時に，ポールの落ち着きのなさが急激に増す点だ。テクストは，ポールの「青春の時期」の終わりを記した直後に，「ポールはますます落ち着かなくなった（Paul became more and more unsettled）」（289），「ポールも後に続きたくて落ち着かなかった（He was restless to follow）」（289），「彼はますますそわそわした（He grew more and more restless）」（289）と，ポールの心理の急激な不安定化を執拗に強調する。この現象の特異性は，『息子と恋人』を教養小説の伝統の中に置くことではっきりと浮かび上がる。教養小説における主人公の若さに関するモレッティの論についてはすでに紹介したが，若さ特有の属性としてモレッティがしばしば用いる語が，「落ち着きのなさ（restlessness）」だ。『息子と恋人』には，幼少期と思春期のポールの落ち着きのなさについての記述が複数箇所にあり，その点では，古典的教養小説と似た特徴を共有しているように見える。だが奇妙なことに，「青春の時期」が終わった瞬間にポールの落ち着きのなさが急増し，さらにポールが童貞と若さを失った後も，依然として落ち着きのなさは存在し続け，物語の最後まで消えることがない。この点において，ポールは，古典的教養小説の主人公とは異なる特徴を有している。

ポールは，若さを失うが成熟できず，落ち着きのない不安定な状態に囚われる。その主な要因が，母への過剰な執着と，女性との性的関係への不安にあることは言うまでもない。母子関係と女性との性関係に悩み葛藤するポールについては，すでに山ほどの先行研究が存在するため，ここで同じような議論を繰り返すことはやめておこう。本論は，ポールの落ち着きのなさについて，性とは全く別の観点から考察してみたい。それは，ポールが何度か語る外国行きの話題だ。従来の解釈では，この話題は，ポールの上昇志向的で未来志向的な意志の表れとして読まれることが多かった。たとえば武藤は，「彼が最後に歩みを向けるノッティンガムという都会の向こうには，さらに，彼がこれから行こうと思っている外国があり，そして，人生の最終目的地であるロンドン郊外がある」と，ポールの将来を想像する（『D・H・ロレンス研究』175）。だがポールの様子を注意深く観察すると，この話題もまた，ポールの落ち着きのなさと深く関連している様子が見えてくる。

この読み直し作業が依拠するのが，ジェッド・エスティ（Jed Esty）による教養小説論だ。エスティは，19世紀末以降の教養小説において，帝国主義の影響により，ナショナルな枠の内部で主人公が成長し成熟するという従来のプロットは成立しなくなり，主人公は海外（具体的には植民地）へ移動し，成長しないまま終わることを論じる。この「反成長」（2）の特徴とつな

がる人物として，エスティは著書の注の中でごく簡単にポールに触れる（224）。以下において，エスティの論では簡単な言及で終わったポールについて，外国へのまなざし，落ち着きのなさ，（反）成長の関係に注目しながら詳細に考察しよう。

ポールの外国行きの願望は，やや意外なかたちで現れる。第11章で，ポールは「落ち着きのない」（326）心理状態のままミリアムとの恋愛関係を続け，ついに彼女と性関係をもつようになる。だがポールはつねに「挫折感」（335）を抱き，二人の関係を続けることはできないと感じる。ポールの行き詰まった心理の描写の中に，次のような記述がある――「ポールは逃げ出したかった。外国へ行くのでも，何でもいい，とにかく逃げたかった」（335）。性関係に悩むポールの心理に，外国行きの願望が何の脈略もなく唐突に一瞬だけ現れる。テクストにはこれ以上の説明がないため，ここでの「外国」が具体的に何を意味するのかを判断することはできない。だが少なくともこの場面から，外国行きのテーマが，落ち着きのない未熟なポールの現実逃避願望と深く結びついていることを確認できるだろう[11)]。

この一瞬だけ噴出した外国行きの願望は，第13章で，ポール自身の言葉によってある程度具体的に語られる。ある晩，ポールは，近いうちに外国へ行きたいとクララに告げる。その理由を問われたポールは，「知るもんか！　落ち着かないんだ（I feel restless）」（396）と答える。この感情的な発言は，ポールの外国行きの願望は，「落ち着かない」現状からの衝動的な逃避願望としての性格が強いことを示唆する。ただしポールは続けて，外国で「デザインの仕事」で金を貯めて，「どこかロンドン近くのきれいな家に，母と一緒に移る」（396-97）という具体的なヴィジョンについても語っている。だがその直後に，「将来のことについては何も訊かないで」，「ぼくには何もわからない」と，「惨め」な声で言う（397）。ここでのポールの落ち着きのなさと未来の拒絶と外国へのまなざしには，エスティの論じる「反成長」の特徴を読みとれる。上に見た第11章の内容も合わせると，ポールの外国行きの願望は，未来に向かって前進し成長することのできない自分の現状をごまかすために，時間軸上の前進を空間軸上の移動にすり替え，どこか別の場所へ移ることで問題を解決したことにしようとするだけの自己欺瞞的逃避願望の表れではないかと疑ってみたくなる[12)]。

その後，ポールが抱く外国行きの願望に変化が見られる。第14章で，癌に苦しむ母を看病するポールは，病気のバクスター・ドーズを見舞いに行く。二人がチェッカーをしながら会話をする場面には，ポールの心理の微妙な揺れを確認できる。まずポールは，クララとの会話では，外国で金を稼ぎ，ロンドン郊外で母と一緒に暮らすための家を買うことを夢見ていたはずなのだが，この場面では，母の死後に海外へ行くと言い，外国行きのタイミングが大きく変化する。

11）別れ話を切り出すポールに対してミリアムが放つ「4歳の子供よ」という発言によって，テクストはポールの未熟さ（あるいは「反成長」）を強調する（340）。

12）この疑念は，ポールを『虹』（*The Rainbow*, 1915）のフレッド・ブラングウェンと比較することで確信に変わる。父から農場を引き継いだフレッドは，生活に充実感をもてず，「落ち着かない（unsettled）」心理状態で，「何か別のもの」を求め，「外国へ行くこと」を夢見るが，「場所を変えても，問題の解決にはならないことを本能的に理解」する（226）。フレッドはポールと同類の悩みを抱えつつ，それをポールよりも自己批判的に捉えることができている。

また，外国で「デザインの仕事」で金を貯めるという，以前の具体的な計画は消え，「どんな仕事でもかまわない」と言い，外国行きの目的は，「何か新しい人生を始め」るという，非常に漠然としたものへと変わる（433）。そして「あなただって」（433）と，バクスターにも新たな人生の開始を促す瞬間，人生の再出発のテーマが，ポール個人の問題ではなく，バクスターと共有すべきものとなると同時に，外国行きの話題そのものは後景化する。人生の再出発のための場所を見つけられず「どこから始めりゃいいのか，わからねえ」と言うバクスターに対して，「なるようになるもんだよ」と言い，直後に「何か自分でしようとしたってだめだ――少なくとも――いや，どうかな」（433）と自問するポールの言葉は，ポールにとっても，人生の再出発のために外国行きが決して絶対条件ではないことを示唆する。

母の死後，ポールは再びバクスターと会い，人生の再出発について語り合う。39歳のバクスターに対して，ポールは「もうすぐ人生の盛りだ」，「まだまだ生きる力はある」と言葉をかけ，そして「ぼくらは，まだまだ何でもやれる力がある」と言う（447）[13]。ポールは，最初はバクスターを主語にして人生を「生きる力」について語るのだが，その後，主語が「ぼくら」となり，自分とバクスターを一括りにする。この文法上の変化が示すのは，ポールがバクスターに対して語る言葉は，自分自身に向けた言葉でもあるということだ。上の発言の後，二人の目が合い，「互いの中に情熱の力を確認し」，一緒にウィスキーを飲む（447）。前回の二人の対話の場面では，チェッカーをする様子を通して二人の心理的交流が間接的に描写されていたが，今回は，二人は互いに視線を合わせ，一緒に酒を飲むことで，絆を共有する。そしてポールはバクスターにこう語る――「また元の場所からやり直せばいい」（447）。この言葉は，前回の面会のときにバクスターが言った「どこから始めりゃいいのか，わからねえ」という問いに対する明快な回答となる。そしてこの場面でポールとバクスターが文法上一括りになっているのであれば，この言葉は，ポールが自分自身に向けて提示した答えにもなるはずだ。つまり，ポールが人生を再出発すべき場所は，どこか別の場所である必要はなく，「元の場所」から始めればよいということだ。

ポールが最後に外国行きの気持ちを友人に語るのは，最終章で，母を失って憔悴状態の彼がミリアムと会う場面だ。ミリアムはぼろぼろになったポールを救おうとして結婚を提案するが，ポールはためらう。結婚しなかったらどうするのかとミリアムに訊かれ，ポールは「わからないよ――何とかやっていくだろう。近いうちに，国外に出るかも」と答える（461）。「わからないよ」という言葉は，以前にクララに外国行きの理由を問われたポールが発した「知るもんか！」（396）という落ち着きのない叫びの形を変えた反復だ。このときの彼の言葉には，外国を目指す積極的な意欲も具体的な計画もない。外国行きは，ミリアムと結婚しなかった場合の

13）ポールは，この後に会うミリアムについて，「若い盛り」の喪失と「老い」を強調するのに対して（460），ミリアムよりも遥かに年上のバクスターには「人生の盛り」と言っており，明らかに不自然である。ここには，スーザン・ソンタグ（Susan Sontag）がジェンダー間における「加齢のダブル・スタンダード」（19–24）と呼ぶ価値観が入り込んでいると考えられる。

漠然とした選択肢の一つにすぎなくなっている。

ここまでの考察から，ポールの外国行きの話題が，彼の自己実現の意志の表れではなく，彼の落ち着きのなさと成長の不安定さの表れであることが明らかだろう。そしてこの現象に注目しながらプロット展開を最後まで追うことで，ポールが町の明かりに向かって歩いていく姿を描く小説のエンディングをも大幅に読み直すことが可能になる。次節は，小説最終章のポールを集中的に分析する。

5. 息子と母

母を失ったポールの様子を描く最終章では，時間と空間の感覚がきわめて曖昧で混乱した世界が展開する。夜の闇の中，ポールは，「すべてが止まってしまえばいい，そうすればまた母の側にいられる」と思う（455）。ポールは，絶望と疲労と酒の効果によって，時間の静止した世界を自ら作りあげ，再び母と一緒になろうとする。エスティはポールの特徴を「発達停止」(224) と呼ぶが，小説の最終章のポールは，教養小説の主人公の成長に必要なプロット上の時間軸を拒絶することで，まさに意識的に自らの発達を停止しようとしていると言える。あるいはポールは，古典的教養小説の物語構造を自ら再現しようとしているとも言える。どういうことか。モレッティによれば，古典的教養小説では，主人公が社会と融合する「特権的な瞬間」に，「物語の時間」が止まることで，「締めくくられる」(26)。幸福の実現は，そのまま「時間が止まってほしい」という願望を助長し，「エンディングの終幕感」を強化する（118）。換言すれば，古典的教養小説は，幸福な結末によって，時間を不変的な，「おとぎ話」のような，「円環」的流れへと変えること――「時間の廃止」――を特徴とする（19）。ポールは，まさに古典的教養小説の構造を模倣し，自らの妄想によって時間を止め，母との再結合という偽りの幸福な結末を作り上げることで，成長を達成しないまま強引に自らの物語の幕を閉じようとしている。

だが作中の一登場人物に小説を終える権限などあるはずもなく，テクストの語りは彼の不安定な心理の描写を継続する。ポールの，そしてテクストの時間感覚はさらに曖昧になり，「何もかもが融合して，一つの大きな複合塊と化した」ような感覚へと陥っていく（455）。このような曖昧な世界認識の中，「いつも独りで，彼の魂は初めは死の側へ，次には生の側へと，執拗に揺れ続けた。本当に苦しいのは，どこへも行く所がなく，何もすることがなく，何も言うことがなく，彼自身が無に等しいことだった」(456)。「行き場所がなかった。〔……〕彼には居場所がなかった」(467)。若さの喪失と同時に急増したポールの落ち着きのなさは，最終的に，「生」と「死」の間での揺れ動きというきわめて危険な現象へと変化する。ここで繰り返される‘nowhere’という語は，（外国も含めて）たとえ場所を移動しても，それがポールの抱える人生の苦難の解決になることは決してないことを物語っている。

それでもポールは時間を否定し，場所の問題に執拗にこだわる。

> 時間はなく，空間のみが存在した。母はかつて生きていたけれど今はいないなどと，誰が言えようか。母はある場所にいて今は別の場所にいるという，それだけのことだ。ポールの魂は母から離れられなかった。母は遠く夜の世界へ逝ったが，今でも彼は母の側にいた。二人は一緒だった。(464)

ポールの意識が作り上げた無時間的空間から成る世界において，母の死もまた，場所の移動として捉えられる。「母は遠く夜の世界へ逝った」という箇所は，原文では‘Now she was gone abroad into the night’と記述されている。見逃してはならないキーワードはもちろん‘abroad’だ。ポールの疲れ切って不安定な意識は，彼が繰り返し――だが漠然と――語っていた海外行きのテーマを，母の死を受け入れることを拒絶するためのレトリックとして転用し，母の死を異国への移動へとすり替える。この点からも，ポールにとって外国行きの話題が，いかに自己欺瞞的・現実逃避的な手段として一貫しているかがわかるだろう。

上の引用からは，ポールの外国行きのテーマについて，矛盾する二つの解釈が引き出される。一つは，ポールは――少なくとも母を失って憔悴しきった状態のポールは――安易に外国行きを選択してはならないという解釈だ。なぜなら，ポールの妄想が作り上げた世界において，異国は死んだ母がいる場所でもあるからだ。テクストの構造上，外国へ行くことは，母のいる死の世界へ向かうことと同義になってしまう。最終的にポールは闇の世界に背を向けるのだが，このときポールは外国にも背を向けていることになる。同時にもう一つの解釈も成立する。かつてポールは，「家（ホーム）とは母の傍らのことだった」(289) と感じていた。だとすれば，母を失って落ち着きなく揺れ続ける最終章のポールは，「ホーム」(家＝故郷＝母国) の外部（つまり異国）を放浪していることになる。最終章のタイトルである‘Derelict’は，母を失い極度に不安定な状態に陥ったポールを表すと同時に，海を漂流する遺棄船のイメージを喚起する。また，本論の冒頭に紹介したガーネット宛の手紙の中で，ロレンスは，母の死後のポールの行動を‘drift’と表現しており (*Letters* 477)，やはり漂流のイメージを連想させる。矛盾する二つの解釈。ポールは「ホーム」にいると同時に「異国」にいる――より厳密には，「ホーム」でも「異国」でもない「どこでもないところ (nowhere)」にいる。ポールは意図的に自身の内的世界から時間性を消去したが，時間性の消去は，結果的に，空間性の消去をももたらし，この世界からポールの居場所を奪うことになる。

このようなきわめて曖昧で混乱した状態の中で，小説のエンディングの，町の明かりへ向かって歩いていくポールの姿は，どのような意味をもつだろうか。

> いや，ぼくは屈しない。さっと向きを変えると，彼は金色の燐光けぶる町の方に歩き出した。手を固く握りしめ，口も固く結んでいた。母を追って闇に向かう道を行くことを拒んで，かすかなざわめきが聞こえてくる輝く町の方へ，きびきびと歩いていった。(464)

闇の世界への誘惑に屈することなく「さっと向きを変える」行為には，ポールの断固たる決意を読みとることができるかもしれない。ただし注意しなければならないのは，テクストは，最終章のたった11ページの範囲に，ポールが踵を返す行為を5回も設定し，この世界に居場所を失い，落ち着きなく彷徨うポールの不安定さを強調している点だ。暗闇から「さっと向きを変える」ポールの姿はたしかに力強い。だがこの行為もまた，踵を返す反復行為の一部へと回収され，決定力を奪われてしまう可能性を孕んでいるのも事実である。それでも，「固く握りしめ」た「手」と「固く結ん」だ「口」が，その可能性にかろうじて抵抗しえていると言えるのかもしれない。

そして最後の一文に独特の力強さを加えているのが，「きびきびと（quickly）」という一語だろう。武藤が指摘するように，「「生きている」という古義」を含むこの「動的生命語」（『D・H・ロレンス研究』111）は，たしかに，ポールが生の世界へ向かっていくことを保証してくれるだろう[14)]。ただしこの語には別の含みがあることも無視できない。テクストは，エンディングのたった4ページほど前で，全く別の文脈でこの語を用いている。それは，ミリアムの若さの喪失についての記述だ――「ミリアムの若い盛りはあっという間に（quickly）過ぎ去った」（460）。この小説において，‘quickly’という語は，「きびきびと」躍動する生命の感覚を伝える語であると同時に，自らが表す生命感を「あっという間に」奪い去ってしまう可能性をも秘めた，深いアンビヴァレンスと脆さを秘めた語として作用している[15)]。

このような危うさを抱えつつ，それでも小説の最後に‘quickly’という一語を配置したことの意味と効果はきわめて大きい。なぜならそれは，生命の躍動感に満ちた単語であると同時に，何よりも速度性・時間性を帯びた単語であるからだ。‘quickly’という語の力強い時間性は，生と死の境界が曖昧な無時間的世界を彷徨うポールの人生に，そしてテクストそのものに，現在から未来へとまっすぐに向かう明確な方向性を備えた時間の流れを回復してくれる。その効果によって，町へ向かうポールの歩行は，単なる空間的移動を意味するだけでなく，未来へ向かう時間的前進をも意味することになり，ポールが向かう先は，「元の場所」であると同時に，新たな出発のための場所となる。その先の将来に，ポールが外国へ行くのかどうかという，場所

14）ハリー・T・ムーア（Harry T. Moore）も，ここでの‘quickly’は‘*rapidly*’よりも‘*livingly*’を意味すると述べる（105）。武藤は，‘quickly’の直前に打たれたカンマにも注目し，これによって「最後の一語が強調される」と述べる（『D・H・ロレンス研究』111）。武藤は触れていないが，武藤と全く同じ点に注目し，武藤とは正反対の解釈を提示するのが，小説家のアントニー・バージェス（Anthony Burgess）だ。バージェスは，カンマなしの‘He walked quickly’という表現では「あまりにも決定的な」印象を与えてしまうため，カンマを打つことで‘quickly’という語が「文末で不安定にぶら下がっている」状態が適切であると述べる（55）。この非常に些細な箇所から読者が受ける印象はさまざまだと思われるが，本論はバージェスよりも武藤の解釈を支持したい。その正当性を補足説明するために参照したいのが，本論の第4節で引用した，若き日のポールが語る芸術論だ。「外形のこわばり」ではなく「揺らめき」に満ちた「生の原形質」を重視するポールの発言中に，次のような一文がある――「本当は，揺らめきが内部にあるんだ（The shimmer is inside, really）」（183）。この言葉とエンディングの一文を並べると，エンディングの一文は，ポールの芸術論を文体のレベル（カンマ＋副詞）で反復しつつ，「揺らめき」に満ちた「生の原形質」を「きびきびと（quickly）」という「動的生命語」（武藤『D・H・ロレンス研究』111）に変換し，ポールの実際の行動によって表現していると解釈することが可能だろう。

15）エンディングの‘quickly’という語の決定力を疑う論として，たとえばBuckley 223を参照。

の問題については，読者が自由に想像すればよいことであり，そもそも本論の考察にとって，場所の問題はそれほど大きな重要性をもたない。小説が幕を閉じる直前に，‘quickly’という強力な生命力と時間性に満ちた起爆剤のごとき一語を投入することで，一瞬（クイックリー）にして空間軸を時間軸に変換し，ポールを時間の軌道に乗せて前進させたこと，そしてポールの成長物語の時間が再び未来へ向かって進み始めたこと――この点にこそ，この小説の結末の最大の意味がある。

6. ケアに満ちた教養小説

本論最終節では，ポールの（反）成長をケアの観点からより徹底して再考し，さらに，教養小説としての『息子と恋人』そのものの再解釈と再評価を行う。まず，教養小説の歴史的変遷についてのモレッティによる論考を簡潔にまとめよう。モレッティによれば，古典的教養小説――その代表格が『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』（*Wilhelm Meisters Lehrjahre,* 1796）と『高慢と偏見』（*Pride and Prejudice*, 1813）――の最大の特徴は，個人と社会の間につねに存在するはずの亀裂，緊張，衝突を美学的・象徴的に解消し，個人の成熟・幸福と社会への統合を完全に一致させることにある。その結果，主人公は人生の意味と幸福を獲得するが，その一方で，個性と批判的精神を発揮して「解釈」する「自由」を剥奪されることになる。だが主人公は社会の幸福と個人の幸福を同一視するイデオロギーを完全に内面化しているため，自由の喪失は物語上問題とはならない（63）。その後，歴史の変化の中で，古典的教養小説の「あまりにも完璧な」（72）象徴的・調和的解決は通用しなくなり，19世紀の教養小説では，「亀裂」，「緊張」，「不均衡」，「不確定性」，「不連続性」といった「現実」が前景化・主題化され，個人が成熟して社会に融合するという古典的構図は成立しなくなっていく（96–97）。

ここで我々は，ある興味深い現象に気づくことになる。それは，モレッティが論じる教養小説の歴史的変遷と同様のパターンを，『息子と恋人』における母子間のケア関係の変化に見出せる点だ。すでに見たように，病のポールをガートルードが看病するエピソードでは，長期にわたって彼女が体験したはずのケア行為と心身の負担に関する具体的な記述はいっさいなく，母に抱かれて「愛の安らぎ」を感じるポールの様子と，「二人の心」が「完全に親密な状態へ融合」する様子のみが強調される（171）。ホネットであれば「根源的な融合体験」，「完全な充足状態」（『承認をめぐる闘争』141）と呼ぶであろうこの母子関係は，意外なことに，古典的教養小説の主人公が社会へと統合される様子についてモレッティが用いる語彙をほぼそのまま当てはめて説明することができる――「おとぎ話のような閉じた世界」（28），「世界の中に存在することの心地よさと安らぎ」（36），「最も調和的な解決」（15），「総合」（16），「象徴の美的調和」（63），「完璧な物語作用」（72）。対照的に，物語後半の，ポールとアニーによる母の看病のエピソードでは，「安らぎ」や「融合」といった美化・理想化されたイメージはいっさいなく，「ケア実践」に内在する「矛盾や軋轢，さらには不満」（岡野153）が詳細に描写される。教

養小説において「亀裂」,「緊張」,「不均衡」,「不確定性」,「不連続性」といった「現実」（Moretti 96–97）が焦点化されるように。

このような特徴を踏まえると，ポールは，教養小説の多くの主人公が経験する個人と社会の間の亀裂と葛藤を，主にケア関係を通して体験していると理解することができる。別のまとめ方をすれば，個人の社会への幸福な融合から個人と社会との亀裂へと焦点がシフトする教養小説の系統発生的変化が，『息子と恋人』にはケアのレベルで個体発生的に現れている。教養小説としての『息子と恋人』の決定的に重要な特徴は，主人公が母子一体の状態から思春期を経て母からの分離と自立へと向かって成長していく過程の最終段階に[16]，子による親のケア行為を挿入することで，直線的プロットを意図的に妨害する点だ[17]。

このプロット展開の意義を捉えるうえで重要な参照対象となるのが，ケアの倫理を提唱したキャロル・ギリガン（Carol Gilligan）の『もうひとつの声で』（*In a Different Voice*, 1982）が，女性を主人公とする教養小説に触れる箇所だ。ギリガンは，分離と自立を発達の指標とする男性中心的なモデルから排除されてしまいがちな，相互依存関係を基盤とする（女性的）発達モデルを探究する議論を展開する過程で，ジョージ・エリオット（George Eliot）の『フロス河畔の水車場』（*The Mill on the Floss*, 1860）とマーガレット・ドラブル（Margaret Drabble）の『滝』（*The Waterfall*, 1969）を並べ，約1世紀の時代を超えて変わらない女性特有のテーマについて次のように論じる。

> この二つの小説は，このように，利己的だとする判断と，その判断が含意する自己犠牲という美徳の圧力が女性に対してかかり続けていることを例示している。これこそ，うら若き女性を主人公とする小説の軸となるところ，すなわち，無傷の純心そのものの子供時代と，〔決定に〕責任をもって参加し選択する青年期とを分かつ教養小説の転機に必ず登場するお決まりの判断なのだ。婦徳は自己犠牲にあるとする道徳観は，責任と選択という成年期の課題に道徳的な善の問題をぶつけることによって，女性の発達過程を複雑にしてきた。（Gilligan 131–32;〔　〕は邦訳書訳者による挿入）

ギリガンが述べるように，女性主人公が「教養小説」の「転機」でぶつかる重圧が「女性の発達過程」を「複雑」にするならば，『息子と恋人』は，男性主人公の（反）成長プロットの「転機」に息子による母の看病を設定し，自立と分離への意志と母へのケアの義務の間の激しい葛

16）ホネットの論を代表的な例とする母子一体から分離へという単線的成長モデルは，ケアの倫理の立場から批判されている。ギリガンは，「男性たちにとって分離の過程であったものは，女性たちにとっては心の内なる区切りまたは心因性の〔防衛的な〕分裂を生み出さざるをえない乖離の過程だった」と指摘する（Gilligan xiii;〔　〕は邦訳書訳者による挿入）。岡野は，この種のモデルは，母の人格と役割の背景化，依存関係の否認，公私二元論の強化，エディプス幻想への囚われ，といったさまざまな問題を含んでいると指摘する（198–209）。平山は，多くの男性に見られる「分離と等置された自立への自己強迫」は，「親と向き合ったときに，自分がケアされる存在に自動的になってしまうこと，依存的ではない形で親に向き合う自信がないことの裏返しである」と指摘する（12）。

17）『息子と恋人』を息子による母の介護の観点から読み直す可能性について，河野がごく簡単に触れている（243）。

藤を彼に体験させることで，彼の「発達過程」をより「複雑」なものにしていると言える。

ケアを体験するポールの苦悩と葛藤についてはすでに確認したが，ここでは，ケア行為を通して親子の関係性が複雑にシャッフルされる様子を詳しく見ておこう。癌を患うガートルードについて，「白髪」の描写によって老いが表現されると同時に，「子供」あるいは「少女」のイメージが複数回強調される（419, 420, 422, 428, 429, 435, 438, 443）。ガートルードの白髪まじりの髪にブラシをかけ，彼女にミルク――栄養を薄めるために水を足したミルク，そして最終的には多量のモルヒネ入りのミルク――を与えるポールは，〈母〉的存在となり，二人の間の母子関係が逆転する（ただし，修辞レベルの〈母〉的イメージとは別に，実際にはこの場面が，ポールが「ケアする存在としての「息子であること」」（平山17）に向き合う瞬間であることは重要なポイントである）。同時に，ガートルードにモルヒネ入りのミルクを飲ませることを計画するポールとアニーは，「いたずらを企む子供」（437）のように一緒に笑い，意図的に幼児性を演じる。さらに，ガートルードの体内に巣くい，「脇腹」に「拳二個分」もの大きさの「瘤」（415）を作る癌は，妊娠のイメージを想起させないだろうか。ガートルードの身体の一部であると同時に異物である癌は，彼女の身体を内部から蝕む。テクストは，その描写に，癌を主語にして‘gnaws’という動詞を用いる（432）。この語を字義的に理解すれば，まるで存在しないはずの胎児が，生えているはずのない歯で母の体内をかじって苦しめているかのような，グロテスクなイメージが喚起される。不気味なことに，かつての母子の一体性を表す「完全に親密な状態」への「融合」（171）という表現は，年老いた（そして「少女」と化した）ガートルードと癌の関係にこそぴたりと当てはまってしまうことになる。

修辞レベルにおいて母子関係の逆転・混乱した不気味でグロテスクですらある状況において，〈母〉的役割――実際には「ケアする存在としての「息子であること」」（平山17）――を引き受けるポールが，かつて自分が母から受けたはずのケアを振り返ることができたかどうかはわからないし，テクストにそのような記述はない。だがロマン化された母子一体のケア関係とはあまりにも対照的なこの場面は，読者の想像力を，遡及的に，かつてケアする側であったガートルードが体験したはずの苦悩へと導くはずだ。我々読者は，ポールが知らない，あるいは忘れてしまった，多くのことを知っている。たとえば，ポールを身ごもったガートルードが，家庭の「貧しさ」と「醜さ」と「卑しさ」のため，子を生みたくないという「みじめ」な気持ちを抱いたこと（13）。愛されずに生まれたポールを心の「重荷」と感じるが，「生まれてきたからには，その分だけもっと愛してやろう」と決意したこと（50–51）[18]。

小説の語り手は，ポールの成長に伴い，ポールの視点に寄り添う傾向が強いため，母の存在を，ときには愛の対象として過剰に理想化し，ときには子の成長を阻む存在として過剰に脅威化し，彼女の実像を見えにくくする。だが同様に，語り手は，母の看病に奮闘するポールの視

18）出産をめぐるガートルードの葛藤は，ギリガンの『もうひとつの声で』で紹介されている，出産と中絶をめぐって葛藤する複数の女性たちの声に含めて理解することが可能だろう。

点に寄り添い，ケア行為に内在するさまざまな亀裂と葛藤と苦悩を詳細に描くことで，結果的に，物語の前半で自身の語りが構築したはずのロマン化されたケアのイメージを解体し，ケア実践者としての等身大の母親像について再考するためのきっかけを読者に提供することになる。

このように，テクストの終盤に設定された息子による母のケアのエピソードは，母子一体の状態から分離・独立へと進む単線的プロットを妨害し，複雑化し，主人公の（反）成長物語を，自律と自立の観点ではなく，ケアの相互関係の観点から振り返らせる。その結果，「母の愛は，子との調和的な共生的統一を前提としないし，それを望むものでもない」という可能性や，「母親が子との対応のなかで感じる戸惑いや葛藤」（岡野213）[19]といった，テクストがあえて前景化することのなかった側面が浮かび上がってくるだろう。あるいは，主体が構築される過程で「すでにわたしたちの意識の外に放擲されてしまっているかもしれない，脆い記憶」――「他者から受けたケア，つまり注視，気遣い，労苦，葛藤，そして愛情」（岡野151）[20]――を，読みのレベルである程度回復することを可能にするだろう。さらには，「依存を「なかったこと」にし，自立性と自律性を捏造するために，個人としての存在を認めてこなかった他者――私的領域において依存してきた他者――」としての母に対し，ケア行為を通して「自分とは別の人格をもつ個人として向き合い」，さらに自分が「「息子であること」に向き合う」ことで，「自立と自律のフィクション」が解体される可能性へと繋がるだろう（平山31）。

主人公ポールの（反）成長の過程を描く20世紀前半の教養小説『息子と恋人』に，その後の時代が涵養してきたケアの倫理を導入して再読すること。そのとき，この小説における（反）成長，自律，自立，依存，ケア，母子関係，家族関係，社会関係，労働，疲労，老い，病，死といった「生きること」の多様な側面を新たに読み直すことが可能になり，必然的に，この小説は，「イギリスの何千もの若者たちの悲劇」（Lawrence, *Letters* 175）という，ややもするとナルシシズムと自己憐憫に陥りがちな枠を超えて，人生を生きる人々の多様な相互依存関係の「全体的で連続的な経験」（Williams, *The English Novel* 175）を描くケアに満ちた物語として我々の時代に生まれ変わることになる。この新たな読みのパラダイムは，「人生の肯定的な側面」（武藤「訳者あとがき」788）に満ちた小説という，本論の最初に紹介した武藤による『息子と恋人』論を決して否定するものではなく，むしろそれをより豊かに補強し拡大してくれるはずだ。なぜなら，ケアとは，何よりも，「生きることを肯定する営み」（村上1）なのだから。

19）サラ・ルディック（Sara Ruddick）『母的思考――平和の政治を求めて』（*Maternal Thinking: Toward a Politics of Peace*, 1989）の主張を岡野が要約した表現。

20）アドリエンヌ・リッチ（Adrienne Rich）『女から生まれる』（*Of Woman Born: Motherhood as Experience and Institution*, 1976）の論を踏まえての岡野の言葉。

参考文献

＊訳出にあたって準拠した翻訳書がある場合はその旨併記する。一部表現を調整している箇所もある。

Alden, Patricia. *Social Mobility in the English Bildungsroman: Gissing, Hardy, Bennett and Lawrence*. UMI Research P, 1986.

Bohata, Kirsti, Alexandra Jones, Mike Mantin and Steven Thompson, editors. *Disability in Industrial Britain: A Cultural and Literary History of Impairment in the Coal Industry, 1880–1948*. Manchester UP, 2020.

Buckley, Jerome Hamilton. *Season of Youth: The Bildungsroman from Dickens to Golding*. 1974. Harvard UP, 1975.

Burgess, Anthony. *The Life and Works of D. H. Lawrence*. 1985. New ed., Galileo Publishers, 2019.

The Care Collective. *The Care Manifesto: The Politics of Interdependence*. Verso, 2020.　岡野八代・冨岡薫・武田宏子訳『ケア宣言―相互依存の政治へ』大月書店，2021年。

Eagleton, Terry. *Literary Theory: An Introduction*. 2nd ed., 1996, Blackwell, 1997. 大橋洋一訳『文学とは何か―現代批評理論への招待［新版］』岩波書店，1997年。

Esty, Jed. *Unseasonable Youth: Modernism, Colonialism, and the Fiction of Development*. Oxford UP, 2012.

Gilligan, Carol. *In a Different Voice: Psychological Theory and Women's Development*. 1982. Harvard UP, 2003. 川本隆史・山辺恵理子・米典子訳『もうひとつの声で―心理学の理論とケアの倫理』風行社，2022年。

Gillis, Colin. 'Lawrence's Bildungsroman and the Science of Sexual Development'. *Twentieth-Century Literature*, 60.3, Fall 2014, pp. 273–304.

Kittay, Eva Feder. *Love's Labor: Essays on Women, Equality and Dependency*. 1999. 2nd ed., Routledge, 2020.

Lawrence, D. H. *The Letters of D. H. Lawrence*. Vol. 1, 1979, edited by James T. Boulton, Cambridge UP, 2002.　吉村宏一・田部井世志子ほか編訳『D・H・ロレンス書簡集III　1912』松柏社，2005年。

――. *The Rainbow*. 1915. Penguin Books, 1995. 中野好夫訳『虹』『ロレンスII』新潮社，1993年，317–812頁。

――. *Sons and Lovers*. 1913. Penguin Books, 1994.　小野寺健・武藤浩史訳『息子と恋人』筑摩書房，2016年。

Millet, Kate. *Sexual Politics*. 1970. Columbia UP, 2016.　藤枝澪子・加地永都子・滝沢海南子・

横山貞子訳『性の政治学』ドメス出版，1997年。

Moore, Harry T. *The Life and Works of D. H. Lawrence*. George Allen and Unwin, 1951.

Moretti, Franco. *The Way of the World: The* Bildungsroman *in European Culture*. New ed., translated by Albert Sbragia, Verso, 2000.

Sontag, Susan. 'The Double Standard of Aging'. *The Other within Us: Feminist Explorations of Women and Aging*, edited by Marilyn Pearsall, Westview P, 1997, pp. 19–24.

Williams, Raymond. *The Country and the City*. 1973. Vintage, 2016.　山本和平・増田秀男・小川稚魚訳『田舎と都会』晶文社，1990年。

――. *The English Novel: From Dickens to Lawrence*. Chatto and Windus, 1970.

岡野八代『フェミニズムの政治学―ケアの倫理をグローバル社会へ』みすず書房，2021年。

小川公代『ケアの倫理とエンパワメント』講談社，2021年。

川本静子『イギリス教養小説の系譜―「紳士」から「芸術家」へ』研究社，1973年。

河野真太郎『新しい声を聞くぼくたち』講談社，2022年。

寺田健比古『「生けるコスモス」とヨーロッパ文明―D・H・ロレンスの本質と作品』沖積舎，1997年。

トロント，ジョアン・C「ケアするのは誰か？―いかに，民主主義を再編するか」岡野八代訳，『ケアするのは誰か？―新しい民主主義のかたちへ』ジョアン・C・トロント／岡野八代，白澤社，2021年，19–82頁。

平山亮『介護する息子たち―男性性の死角とケアのジェンダー分析』勁草書房，2017年。

ホネット，アクセル「承認としての再配分―ナンシー・フレイザーに対する反論」『再配分か承認か？―政治・哲学論争』ナンシー・フレイザー／アクセル・ホネット，加藤泰史監訳，法政大学出版局，2012年，117–216頁。

――『承認をめぐる闘争―社会的コンフリクトの道徳的文法［増補版］』山本啓・直江清隆訳，法政大学出版局，2014年。

武藤浩史『D・H・ロレンス研究―小説・思想・本文校訂』慶應義塾大学法学研究会，2022年。

――「訳者あとがき」『息子と恋人』D・H・ロレンス，小野寺健・武藤浩史訳，筑摩書房，2016年，785–98頁。

村上靖彦『ケアとは何か―看護・福祉で大事なこと』中央公論社，2021年。